

「2017年インドネシア大学スプリングスクール 参加報告書」

京都大学文学部人文研究科言語学専修3年生 モハン・マヌ

このプログラムに参加した主な理由は京都大学で開講されている語学科目の「インドネシア語」を一年間履修していたからです。本プログラムの渡航に先立って、予備語学教室が5日間おこなわれました。その講師はインドネシアの方だったので直接インドネシアの方と知り合う機会にもなりました。この先生の教え方は非常に優れていて、内容も分かりやすかったと思います。応用力を必要とする授業で、授業内容が現地での日常会話の際に非常に役に立ちました。

インドネシアに着いたばかりの頃は不慣れな通貨でのやりとりで戸惑っていましたが、数日後にはその戸惑いが嘘だったかのように現地通貨を使いこなすようになりました。そして、インドネシア語を勉強／練習することができてとても嬉しく思っています。言語を通してインドネシアの文化や人間性の理解にも繋がったのでインドネシアの人々の心が以前よりも理解できるようになった気がします。現地の友達を作ることができたのは大きな収穫です。これからも互いの成長を応援し合い、積極的に協力し合っていきたいと思います。私が努力して日本に留学できたのと同様に、今回出会ったインドネシアの大学生が先進国である日本での修学の機会を得て視野を広げられるようになることを期待しています。私の留学経験、奨学金の情報、日本に対する情熱等について意見交換し、交流することができたので互いに応援し合う機会になりました。このような交流を通して、世の中というものは自分の知識や交友関係によって全く別物に見えるということを今回の経験から改めて学び直すことができました。インドネシア大学の学生達は賢い方が多く、一緒に行動／活動したことで私の勉強不足を反省したくなりました。もっと努力しなければならぬと思わせる機会にもなりました。

インドネシアに行って多くのことに気づきました。まず、現地の女子学生たちは、ヒジャブを被っているながらもファッションやアクセサリーに敏感であるということ。特に女性は色あわせや化粧品などに関心が高く、日本の化粧品会社が戦略的に進出すれば、新たなサービスを提供できる可能性が高いと感じました。また、私がインドの国立大学に在学していた経験と照らし合わせると、インドネシアのインフラやSNS事情がインドより発達しており、大学の授業においても、現代の日本の事情に敏感な若手の講師が多く、講義もアップデートされているという印象を受けました。

今回のプログラムに設定された共同発表という「試練」により、交流の時間と一つの目的に向かって励む機会を得られたことは有難いと思います。しかし、発表や交流の時間が多過ぎると感じることもあり、結果的に安心する時間が少なく、ストレスが重なり続けていたことは否めません。体験授業に関しては、バティックや伝統音楽のガムランやアルンバは楽しく、異国の文化に直接触れることができ脳神経を刺激する貴重な時間でした。バティックは私の故郷であるインドの染物文化に似ていたもので、その技術に関することを詳しく調べてみたくなりました。Taman Mini Indonesia Indah という文化センターを訪れた際、ガムランはバリエーションが豊富で存在すること、そのバリエーションには特有の素晴らしさがあること、インドネシアの歴史や王国に関するさまざまな知識、イスラム教や法律制度の差があること等について、案内して下さった先生の助けを借りて勉強することができました。別の日に、学生さんと一緒に歴史博物館や記念館などに行く機会が得られ、インドネシアの歴史についてさらに学ぶことができました。教会を訪れた際、モスクが対面して立地しており、相互に出入り禁止にはなっておらず、精神的に緊張感があっても話し合うことで仲良く共存できているという事から、まさに世俗的な社会事情を映し出していると思いました。インドネシア語の「ありがとう」や「すみません」についても、インドネシア語の先生が説明してくれた通り、重要なニュアンスを持っている言葉であり、国民の文化の一部を反映していると思いました。感情や人情、つまり人の存在や気持ちを大切にしていることを理解できたと思います。

僕にとって、インドネシアの方々だけでなく、長期間日本人と一緒に行動することも初めての経験でした。このことについても国際的な学習の一つになったと思います。部屋を共有した京大生は割と気さくな人柄で、ほとんど気を遣う必要がなかったことに感謝しています。集団行動を重んじる日本人らしさや細かいところまで気にかけて言動を決めるという点が素晴らしいと思いました。加えて、スケジュールや安全性を重視しながらも、時間を最後まで効率よく使い切ろうと努力していたのが感動的でした。しかしながら、常にこのような行動様式を維持していたら疲れるかもしれないと思うときもありました。

全体的に見ると、私はインドネシアが好きになりました。修学や観光の機会を使って是非ともまた訪れたいと思っています。ただ、発展途上国で生まれ育った僕にとっては東南アジアよりもオーストラリアやヨーロッパのような文化差の大きい場所を訪れたほうが異文化に関する発見が多いかもしれません。とはいえ、文化差が大きければそれだけ馴染みにくく、悩んだりホームシックになる可能性が高いため、このようなプログラムへの初めての参加としては、東南アジア、インドネシアが適当だったと思っています。留学中の留学という貴重な体験でもあり、参加することができて良かったと感じています。